

## 2 北朝鮮の言語学史をどうみるか

キム ハス  
金 河 秀

### 1. 北朝鮮の言語学史を理解するための前提

歴史の記述は一般的に、ある一定の対象の時間的変化と発展を普遍的に、一元論的に、ひとつの巨大な体系を中心にみる方法が大半である。全体の体系を構成するさまざまな部門の現象を、統合された流れのなかのひとつの支流として把握する視点は、歴史学ではなく、言語学的な概念で表現すると「構造主義的」\*1に見るということである。しかし、構造主義的な視点の問題は、非体系的だと思われる対象を容易にその構造から排除してしまうことにある。そのような点で、特に言語学にたずさわる人間が自分たちの活動の歴史を構造主義的な矛盾を克服したうえで把握することは、難しいというよりは、多分に冒険的な思索になると覚悟することに近い。そうでなければ、言語学に関するより大きく時代的な問題を発展的に再解釈する作業には、脱構造主義化とまでは言わないまでも、既存の構造に対する認識をいったん解体し、再構造化する試みが切実に求められる。「北朝鮮社会」という、われわれにとっては排除された対象を再構造化する作業は、そのような点で大きな価値があると考えられる。

こうしたことから、今日、北朝鮮の言語学史を俯瞰する筆者の作業は、

---

\*1 構造（主義）言語学：1920-30年代以降から約半世紀にわたって支配的だった言語学理論。言語を記号の体系とみる。

過去の言語学的固定観念と対決する小さな「プロセス」の一部でもある。過去に筆者が北朝鮮の言語研究の状況を考察してきた視点は多分に構造的であり、それと同時に構造主義的だった。当時、南韓の学界が北朝鮮の学問史に注いでいた視線は好奇心、南と北に対する質的評価の欲求、民族的な愛情や期待など、おおよそ3つの視線が往々にして混ざっているか、特定の視点にとらわれがちであった。そのおかげで、北朝鮮の学問的業績についてかなり以前から抱かれてきたさまざまな偏見や感性の克服においては多くの効果が見られたものの、北と南の学問的な視点を統合、あるいは収斂させようとする試みはほとんどなかった。大半の意見が、北朝鮮の言語学も南と大きく違うことはないのだが、冒頭に入る「首領様」ということばが目障りであるとか、愛国心が過度にあらわれているせいで学問的活動なのか政治活動なのか区別がつかないであるとか、目的意識をあまりに露骨に表現していることが学問的に不適切に映る、といった不満であった。逆に、われわれがそのような視点をもつ態度自体に問題はないのかという自己反省は、少なくとも筆者の目にはまったく入ってこなかった。

北朝鮮の国語学に対する南韓の学界の論議は多様な方だが、その学問的アイデンティティと正当性についての言及はほとんどの場合避けられる。北朝鮮の言語研究の傾向について、比較的その性格や流れを規定しようと試みている場合には、大別するといくつかの互いに異なる相貌が見られる。そのひとつとして、唯物論的な基盤に注目する金敏洙 [1989] や、これと類似しているがやや異なる見方としては民族主義的要素に関心を寄せる高永根 [1994]、そして内的な批判を中心にみようとする南基心・金河秀 [1989] などを挙げることができる。

金敏洙 [1989] と高永根 [1994] は、初期の北朝鮮言語学がマルクス主義的な連携性を深く有していた点に注目する。特に金敏洙 [1989] においては、マルクス主義的、唯物論的な哲学的基盤を見出そうとする試みが相当強かった。それに比べて高永根 [1994] は、哲学的な連携よりはソ連の学問

との結びつきと、北朝鮮言語学の民族的性格により注目した。両者は広い意味では類似しているのだが、細部を見るとそのアプローチの方向性に違いが見られる。この2人の作業において際立っているのが、非常に緻密な書誌作業である。分断状況において容易ではなかったであろう資料を非常に細かく点検しようと努力した。一方、南基心・金河秀 [1989] は、北朝鮮の思想的な流れよりは政策的な現象や意味などを取り上げようとしたため、北朝鮮の初期の言語学史を取り扱うこの場での論点とはあまり関係がない。したがって、北朝鮮の初期の言語学研究の成果を振り返るにあたって、どうしても原資料へのアプローチが容易ではない場合には、高永根 [1994] による整理も大きな助けとなる。

北朝鮮のようにわれわれと長い間断絶されていた社会の問題を十分に認識するには、さまざまな資料を整理することも重要な基礎的作業ではあるが、それをどう解釈するかという問題がさらに重要な価値を持つ。また、その解釈を行うにあたり、あちらの社会が意図する観点や態度の問題もまた、対象化し客観化する必要がある。まさにその点で、金敏洙 [1989] と高永根 [1994] には残念な部分が多い。金敏洙 [1989] は、観点がいくぶん古かったこともあるが、典型的な冷戦時代の視点をもとに解釈しようとする傾向が強く、高永根 [1994] は北朝鮮側の解釈をそのまま反復するように引用、羅列する傾向があるからである。そのため、北朝鮮の言語学的産物を、学問的には非常に理解しにくい形で叙述したという弱点が歴然としている。

このふたつの論著を中心に北朝鮮の言語学を解釈すると、当初はソ連の言語学理論を無批判に受容していたのが、ソ連でその理論の正当性が消滅するや北朝鮮もその路線を捨て、のちには民族中心の主体思想チュucheに戻ってしまったという、多分に世俗的な解釈をすることになる。このようにしてかれらの研究史をみると、われわれが真剣に議論する価値などない極めて従属的な学問に過ぎないものとなり、あえて南と北の学問的な差異や共通性

を苦勞して見出す必要もなくなるだろう。また、そうした診断が、それ以降、北朝鮮の言語学を真摯かつ粘り強く研究しようという雰囲気が醸成されない原因となったのではないかという批判を生み出す。

北朝鮮の言語学が歩んだ道をもう少し客観視するためには、その論点と産物がかれらの社会の中でどのような意味を持つのかをもう少し積極的に考えなければならない。もし仮に周時經<sup>チュシギョン</sup><sup>\*2</sup>の意味を当時の時代的背景と関連づけてとらえないとすれば、突如あらわれた特異な人物による、特異な業績に過ぎなくなってしまうだろう。これと同じように、南韓の言語学においてもいえることだが、とりわけ北朝鮮の言語学は分断当時の時代的な問題と切り離して考えることはできない。なぜかれらは「越北」という非学問的な行動をしてまでそのような学術的な言説をリードしていったのか、という問題が、少なくとも我々の視点の基礎に前提されてこそ意味があるのである。北朝鮮の言語学は、そうした問題に対する前向きなアプローチを基礎に南韓の言語学と連携させてこそ、非常に価値ある議論の結果が保障されるのではないかと考える。

## 2. ソ連言語学の意味

むかしから、北朝鮮の言語学を語る際には決まってふたつの政治的な含意のある事件を無視することが許されなかった。そのひとつが「越北」の問題であり、もうひとつが「金科奉」<sup>キムドゥボン</sup><sup>\*3</sup>の問題であった。越北の問題に重きをおくと、かれらの活動を中心部から逸脱した周辺部のこととして捉えがちである。金科奉の問題は政治的な理由による肅清事件であり、学問的な活動が政治領域においてはいつでも排除されうる些細なものとして認識

---

\*2 周時經：1876-1914。朝鮮語の近代的研究の創始者とされる。

\*3 金科奉：1890-?。周時經のもとで朝鮮語学を学ぶ。その後、共產主義革命家となり1945年以降は北朝鮮の要職を歴任するが、1958年に失脚。

させ、したがってその学問的な成果は当然その限界の範囲内に限定されるをえないという前提を常に内包していた。

さらに一步踏み込むと、北朝鮮の言語学は、とりわけ初期においては、ソ連の言語学の影響から自由ではなかったという認識もまた北朝鮮社会に関する重要な情報ではあるが、むしろ北朝鮮を歪曲して伝える逆情報としての役割もしっかりと果たしてしまったと考えられる。特にソ連の言語学の影響について論じる際にしばしば取り上げられてきたマル<sup>\*4</sup>の言語学もまた、北朝鮮の関心事と成果をこきおろすレッテルとしてのみ機能し、一体ソ連の言語学にどのような問題があったのか、その意味をどのように考えなければならないのかという当前あるべき知的関心を喚起することができなかった。そのような点から考えると、われわれ南韓社会の北朝鮮への認識は今ようやく始まったばかりといってもよいだろう。

まず、マルの言語学にどのような問題があったのか。これを少しでも理解しやすくするためにはマルの位置づけが先行しなければならない。すでに金敏洙 [1989] や鄭光<sup>チョンクワン</sup> [1999] で紹介されているように、彼は言語学よりも考古学に関心が高い歴史・文化研究者であったが、特異なのは、カフカス出身で、その地域の非ヨーロッパ言語にかなり通じていたという点だ。すなわち言語学出身というよりは、歴史や文化史に強い関心を寄せた学者だった。そして、その当時、言語学の主流であったインド・ゲルマン学の研究者に比べ、非ヨーロッパ語に関する相当な専門知識を有していたことが知られている。そうした土台のもとに彼はマルクス-レーニン主義に出会い、革命以降、新たな世界観でもって新世界を創建しようとするソビエトの関心を十分引きつける学説を発表したが、それは「言語に関する新理論」と称された。

---

<sup>\*4</sup> マル (Nicholas Ya. Marr) : 1865-1934。グルジア人の言語学者。1920-30年代のソ連で、言語の単一起源論および単線的発展論 (ヤフェト理論) を中核とするマル理論は「マルクス主義的」な言語学の主流となった。

この理論の問題点はすでに金河秀 [1990] で簡略に紹介されており、鄭光 [1999] でも多くの批判的事例が挙げられている。では、なぜソ連当局はマルの理論に正当性を与えたのかという点について推論しておく必要があるだろう。当時は、ソ連の言語学界にさして厚みがなく、水準が劣るというような時代ではなかった。カザン、レニングラード、モスクワなどで錚々たる言語学理論家や学派がすでに自分たちの学説を発展させていた。言語学の外部からやってきたマルの舞台ではなかった。しかし、いわゆる「マルクス主義的な言語学」、当時焦眉の関心事であったであろうまさにこの問題に対して適切に機能すべき言語学は十分に成熟していなかった。当初、マルクスやエンゲルス、またレーニンにおいても、言語問題は他の問題について議論する際に少し触れる程度で、十分に論旨を述べることはなかった（ただしエンゲルスはフランケン方言に関する興味深い論文を書いている）。

このような空白の地においてマルは言語問題を歴史的、社会文化的な流れを織り交ぜて、一定の唯物論的、歴史弁証法的な構成をさもあげな言語理論として発表した。その研究が妥当なものであろうとなかろうと、ソ連当局にとっては非常に歓迎すべきことだったはずである。当時、ソ連は言語学の水準を高めることが目的ではなく、歴史的に例をみない新しい社会を建設し、その妥当性を証明することがなによりも重要であった。ましてやソ連はマルクスとエンゲルスがさほど深く言及することのなかった複雑な少数民族問題を抱えており、レーニンとスターリンは革命の過程でかれらを積極的に引き入れ、「民族自決」に共感を示した。また、そうしたからこそ革命と内戦に成功したのだとも言える。

ここでおそらくソ連当局は、マルの理論からふたつの有用な論点を発見したと思われる。まず、革命の対極にある西欧の言語学理論を批判しうる、それらしい、完全に異なるパラダイムを持った武器を発見した。もうひとつは、当時先進社会だと自負し他の地域に対して支配的な地位を占有していた西欧社会中心ではなく、人類共通の言語、いわば原始言語の性格やそ

の分化過程についての歴史的説明を試みたことは、明らかにソ連の学問が独歩的な問題領域を先占したのと言えるだろう。

乱暴な言い方をすれば、このようなマルの言語に対する問題意識と比較可能な西欧の言語理論となると、米国の言語相対主義理論<sup>\*5</sup>になるのではないだろうか。金壽卿<sup>キムスギョン</sup>が翻訳したカツネルソンの論文（『朝鮮語研究』創刊号、1949）【図1】に出てくる「フランツ・ボアズやエドワード・サピアをその主導者とするアメリカ民俗学<sup>\*6</sup>派は、北部アメリカ種族の……博物館の珍品のごとく研究されている」（102頁）という言葉どおり、強い対抗意識を抱いていた。そのような点で、ソ連当局にとってマルの理論は、西欧社会の偽善的な市民文化、かれらが世界を認識する方法などを根本的に揺るがす道具であり、その言語や社会、文化を歴史的に織り交ぜたパノラマは確かに有用だったと考えられる。しかも、西欧社会の研究成果をもってしては反論を行うことが容易ではない北アジア、カフカス地域の珍しい言語を資料として用いることは、マルクス主義を粗雑なイデオロギーではなく、真の「代案的な世界」を提示するシンボルとして掲げるに値すると思わせただろう。

当時（1920年代から30年代）のソ連は内戦と飢饉、そして農業政策の諸問題によってかなり困難な局面に差しかかっていた。ややもすれば革命の理想と生活の現実との乖離が大きすぎて、危険なほどであった。この危機をいわゆる鉄拳政治ですり抜けたわけだが、ソ連にとって幸いなことだったのか、西欧社会もかなり苦しんでいた。そのような苦痛のなかで、次第に

---

<sup>\*5</sup> 言語相対主義 (linguistic relativity) : 米国では人類学者ボアズ (Franz Boas) が、「遺伝」や「本能」などよりも文化が人間のあり方を規定するという文化相対主義を提唱した。その弟子である人類学者・言語学者サピア (Edward Sapir) とその影響下で研究したウォーフ (Benjamin L. Whorf) は、さらに現実に対する認識は言語によって規定されるというサピア=ウォーフの仮説 (言語相対主義) を提示した。

<sup>\*6</sup> 民俗学 (민속학) : 北朝鮮では民族学・文化人類学に相当する学問領域を「民俗学」と総称する。ロシアの *etnografiya* の訳語である。

## 소베트 一般言語學 三十年

에스 · 데 · 카츠넬손

社會主義 十月 革命은 우리들의 社會的 生育의 物質的 基礎의 發展에 있어 뿐만 아니라 生活의 모든 上層構造的 面과 精神文化의 數 많은 連鎖 위에서 또 새로운 시기를 劃하였으며, 또한 이리하므로써 史密트의 友好的 諸人民을로 하여금 모든 進步的 人類의 前衛部隊로 만들었다. 이데올로기의 文化的 創造의 어느 한 部門도, 全國을 휩쓸이 沸騰하는 活動의 生生 躍動하는 奔流로부터 離脫하여 있는 것은 없었다. 數世紀間의 偏見의 重壓과 貴族의 世界觀의 狹隘으로부터 解放되는 同時, 象牙塔의 幽寂境으로부터 聰明한 全人民의 事業이란 廣濶한 大地로 脫出한 史密트의 科學은 社會主義的 分類의 體系 가운데 名譽스러운 地位를 차지하였으며, 부르주아 西歐羅巴의 墮落的, 半神祕的 奧秘的 『科學』 理論으로부터 이를 무엇이 差別짓는 固有의, 史密트의 刻印을 받았다. 새로운 方向과 明確한 史密트의 面貌를 띠게 된 科學的 活動의 諸部門 가운데서 『實踐的 現實的 意識』(말스와 알겔스) 으로서, 『社會的 實際의 가장 重要한 手段』(레닌) 으로서, 그리고 『發展과 鬥爭의 道具』(스탈린) 로서의 言語 및 言語文化에 關한 科學——言語學은 洪고 末席을 차지하지는 않는다.

史密트 言語學은 史密트 諸地方의 古來의, 最新興의 數 많은 文化中心地에서 展開된, 言語의 部面에서의 廣汎하고도 細分된 實踐的 事業의 土台 위에서 成長하였으며 鞏固하여졌다. 言語科學의 根本的 改革과 새로운 理論的 基礎의 構築은 文化 建設의 緊迫한 必要로부터, 唯一한 社會主義 文化의 創建과 同盟 全人民의 力創

図1 カツネルソン「ソビエト一般言語学の30年」(金壽卿訳)

ファシズムが強く根を張りはじめていた。順調だった米国も1920年代半ばに大恐慌で大きな打撃を受ける。しかし豊富な資源を利用してなんとか立ち直った。日本もまた、この難局を乗り越える過程で満州と中国を攻撃した。ソ連はかろうじてこの時期を乗り切った。ヨーロッパのファシズムはソ連を憎悪したが、かれらの憎悪はむしろソ連の正当性を確認させただけであった。ソ連はついにその実体的存在が認められたのである。国家と制度、そしてその理念や文化はみな存在意義を有するようになり、数多くの弱小／少数民族がソ連に対してロマンを抱いた。

要するにソ連は、さらにいえばマルの理論は、西欧社会、ブルジョア世



界に対抗するアンチテーゼを提示することに成功した。多くの人は否定したが、にもかかわらずスターリンはソ連で階級が撤廃されたと宣言した。哲学的には意味のない言葉であったが、政治的には十分に効果のある宣言だった。

### 3. ソ連の変貌とソ連言語学の変化

第2次世界大戦を勝利で迎えた日、ソ連は、否、スターリンは有名な演説を行う。彼は戦争の勝利を「偉大なソビエト人民」ではなく「偉大なロシア民族の勝利」であると宣言した。すでにソ連はさまざまな民族の共同体というよりは、いつしかロシア化した巨大国家になっていたのである。もはや自らの存在価値を認めてもらおうと躍起になっていた過去の姿とは決別し、全世界を米国と二分する巨人になったのである。ロマンをもつ欲望よりも新世界を守ることがより重要になった。ほどなく広大な土地を誇る中国もかれらの陣営に立った。核兵器も手に入れた。

そうなるとソ連は、数多くの弱小／少数民族の民族性やかれらの固有の文化が染み込んだ土着語の発展を切実な問題と認識するよりも、「現実」における世界的な支配力を一層重要視するようになったと考えられる。したがって、多種多様な諸民族の、多様な言語の歴史的妥当性や不可避な存在理由を説明することよりも、すべての共産社会を代弁する代表性がより重要になったのである。かれらに先行した多くの帝国が内部に多くの少数民族を抱えていたように、かれらもまた、多様な少数民族を抱える、もうひとつの巨大な帝国となったのである。

前述のとおりマルの言語理論は、実のところ言語理論というよりは歴史的なインスピレーションに基盤を置く、そしてその上に唯物論的弁証法の衣をまとったロマンであった。この論理を受け入れる限り、言語的事実にもとづいた言語研究は、互いに相容れない。言い換えると、衣替えの時期

がやってきたのである。

スターリンは、1950年の『マルクス主義と言語学の諸問題』【図2】という論評において、マルの正当性をはっきりと拒絶した。先に述べた北朝鮮言語学研究者たちはこれを西欧構造主義への還元であるとか、真のマルクス主義への回帰であるとし、言語学理論の大変革のように語ったが、これは言語学ではなく、政治的な決断であったと思う。すでにソ連では、唯物論的な言語学がそれなりに活発に自己発展を模索していた。言語と哲学のヴォロシーノフ<sup>\*7</sup>、文学と詩学のバフチン<sup>\*8</sup>、言語発達と失語症研究のルリヤ<sup>\*9</sup>、また言語活動理論のレオンチェフ（とその息子）<sup>\*10</sup>などは、現実の中での言語問題を地道に研究し、むしろ西欧社会に多くの示唆を投げかけるという、唯物論的でありながらも言語学的な、また多くの場合心理学的な成果を掘り起こした。嘲笑気味に言えば、マルはすでにこの世にはいなかったが、のみならず、もはや世界は彼を必要としていなかったのである。

マルの言語学に対する批判のなかで、あたかもその反対論者がひどい迫害を受けていたかのような言及については、まだ少々疑わしい部分が残っている。もちろん、その反対論者のうち、もっとも悲劇的な人物はポリワノフ<sup>\*11</sup>であった。だが、彼が起訴されたのはマル理論に反対したという罪名ではなく、日本のスパイであるという嫌疑だった（彼はかなり独歩的な日本語学者だった）。マルの理論に反対するという行為が起訴の対象となる状況ではなかったと思われる。当時は日本との軍事衝突が続いていた時期で、

---

<sup>\*7</sup> ヴォロシーノフ (Valentin N. Voloshinov) : 1895-1936。ロシア-ソ連の言語学者。『マルクス主義と言語哲学』(1929)などで知られる(ただし同書はバフチンが書いたと言われる)。

<sup>\*8</sup> バフチン (Mikhail M. Bakhtin) : 1895-1975。ドストエフスキーやラブレールの文学研究、言語研究で知られる。

<sup>\*9</sup> ルリヤ (Aleksandr R. Luriya) : 1902-1977。ソ連の神経心理学者。

<sup>\*10</sup> レオンチェフ (Aleksey N. Leon' yev) : 1903-1979。ソ連の心理学者。息子の A. A. レオンチェフ (1936-2004) は心理言語学者。

<sup>\*11</sup> ポリワノフ (Yevgeny D. Polivanov) : 1891-1938。ロシアの言語学者。日本語やアルタイ諸語を研究した。

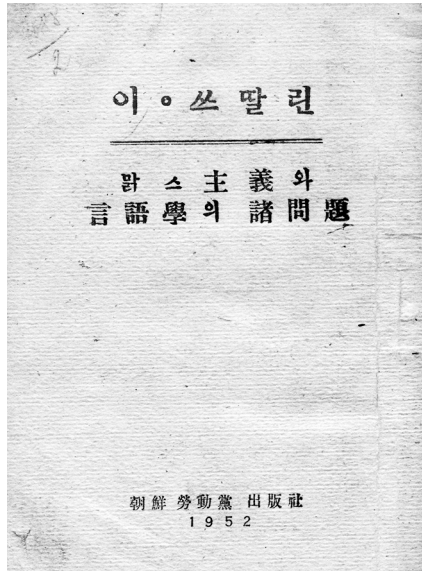


図2 スターリン『マルクス主義と言語学の諸問題』朝鮮語訳（1952年）

地理的にかなり離れた日本の攻撃行為がソ連にとっては非常に危険なものと映り、ソ連が過敏に反応するということが頻繁に起こった時期でもあった。また、だからこそ満州の東北抗日遊撃隊がソ連に制圧され、高麗人が中央アジアに強制移住させられもした。

マルとマル理論が姿を消した過程を誇張して描き、あたかも重大事件であるかのように表現するものもいるが、それ以降もマルの追従者は自分たちの研究を続けた。彼のヤフェト理論を継承したメシチャニーノフ<sup>\*12</sup>（北朝鮮の文献では메시니노프と表記）は、その後もマル理論の枠内で大変興味深い主張を提示している。とくにマルの語彙文化論的な研究を通史論のレベ

<sup>\*12</sup>メシチャニーノフ（Ivan I. Meshchaninov）：1883-1967。ロシア（ソ連）の言語学者で、マルの言語学を体系化した。

ルに発展させたという評価も聞かれる。したがって、マル言語理論の廃棄を天地開闢が起こったかのようにみなすのは、マル言語学に対する客観的認識ではなく、嫌悪感の表現に近い。

#### 4. 北朝鮮の初期言語学はどのような意味を持っていたのか？

言語学は政治とどのような関係にあるのだろうか。おそらくこのような主題自体、非常に興味深く、独立した研究領域になり得るだろう。言語と思考、そして理念、また理念と社会構成などのつながりを考えると、この部分でも無数の論点が存在するだろうが、本稿ではこの部分について深く踏み込む余地はないように思う。

時代の転換期に言語学が一定の役割を果たしてきたことは、言語学史を綿密に検討すればある程度推測することができる。ドイツが現代化する過程でフンボルト\*13とグリム兄弟\*14は、ドイツ語とドイツ国家の連携を強化することに貢献したといえる。これについての論争は一旦措こう。青年文法学派\*15の登場は、産業化および市民社会の発展と十分に連携可能であったと考える。ソシュール\*16の言語学は、西欧語にみられる重要な言語的現象を通じて、非常に普遍的な説明の枠組みを獲得した。インド・ヨーロッパ語中心の言語学が、普遍性の形式を整えたのである（事実、マルの言語学あるいはソ連の言語学者らの関心や批判もここにあった）。それに対し、サピア＝ウォーフの言語相対主義は、珍しい言語や未知の言語の特殊性にもその正

---

\*13フンボルト（Wilhelm von Humboldt）：1767-1835。ドイツの言語学者でフンボルト（ベルリン）大学の創設者。

\*14グリム兄弟（Brüder Grimm）：19c. ドイツの言語学者・民話収集家。グリム童話で有名。

\*15青年文法学派（Junggrammatiker）：1870年代からドイツのライプツィヒを中心に影響力をもった言語学の一学派。

\*16ソシュール（Ferdinand de Saussure）：1857-1913。スイスの言語学者。一般言語学、構造言語学の創始者とされる。

当性を与えた。ヨーロッパ帝国主義とファシズムに対するアンチテーゼの性格が表れていると言える。

朝鮮の初期の言語学者・周時経は、中世の朝鮮に対するアンチテーゼを提示した。つまり近代化の推進において多分に政治的な役割を果たしたのである。振り返ってみると、韓国社会における規範文法に関する論争や標準語の査定および言語純化運動は、近代市民社会における主導権を誰が握るのかという問題と深く関わっていたのではないかと思う。文法は、ある特定の言語規範の正当性を確認し、標準語の査定と言語純化は一定の語彙に対して正当性を与える一方、その他の語彙の正当性を剥奪するための挑戦であった。北朝鮮の言語学者らは当然、解放以前はこうした政治的・時代的・理念的な流れに積極的に賛同した者たちであった。かれらにとって「越北」は、このような自らの歩みとは特に矛盾しない行動であるにとらえられただろう。

一方、<sup>ピョンヤン</sup>平壤に樹立された政権にとっては、政治的、軍事的な安定も重要であるが、何よりも理念にもとづく価値の正当性を確保することが急がれたと考えられる。伝統的な中心地から地理的に離れた不利な条件は「民主基地論」\*17で克服し、土地改革を通じて大多数の住民の利益を保障し、さらに文盲退治、漢字の廃止などにより、社会革新を躊躇していた南韓の政府よりも新たな時代に見合った正当性を確保しようとする努力に、言語学者は当然呼応しようとしたであろう。さらに、このような差別的な路線に一層普遍的な価値を与えることのできる政治的・学問的な言説が必要とされていたであろうし、それに対してソ連の「最新言語学理論」が十分に応答したと思われる。

対する南韓では、言語学の領域において「民族性の言説」と「科学性の

---

\*17 民主基地論：1945年以降の南北分断状況において、北朝鮮を朝鮮統一および民主主義革命の根拠地としなければならないという考え方。

言説」が衝突し、非常に長い間、政治的にまたは時代的に有用な理念の枠組みを提供する言説を展開することができなかった。1980年代に入り、なんとか一定の妥協的条件のなかである程度の整理が行われたが、もどかしくもつらいのは、その後言語学において民族性の言説や科学性の言説が統合されることなく、非常に異質な性格を持ち、異質な機能を果たすこととなったことである。

結局、北朝鮮の言語学者が、一方では当時最も信頼のおける友邦であったソ連の学問的な潮流に共感を示し親密さを覚えていったのは、北朝鮮社会の正当性の根拠を強化するための、政権への重要な貢献だったのであり、他方では北朝鮮社会における再編成と革新を主導する勢力と手を結ぶことで、その後の言語政策を遂行しうる動力を獲得したのだと考えられる。

したがって、北朝鮮の学界が示したソ連の言語学、特にマルの言語学に向けた関心は、さほど大きな誤謬ではなく、さほど惨憺たる破局を招いたものとみなさない方がよい。ブルームフィールド<sup>\*18</sup>の言語学理論が隆盛ななかで、チョムスキー<sup>\*19</sup>の言語理論がその限界を批判する形で登場し、近年コンピューターを利用した量的な研究や対話分析を通じた質的な研究が行われても韓国社会にさほど動揺が生じないように、北朝鮮の言語学は当時の時点において国際関係のふたつの政派の一方、自分たちに最も有利な側の肩を持ったに過ぎない。

むしろ北朝鮮の学界はその後、辞典編纂、文法研究、文化語<sup>\*20</sup>政策などを通じて自らが直面する社会問題に対応していった。一部の現象は南韓と類似しており、一部は異なっていた。南韓に比べて相対的に民族性の言説

---

\*18ブルームフィールド (Leonard Bloomfield) : 1887-1949。米国の言語学者。アメリカ構造主義言語学の創始者。

\*19チョムスキー (Noam Chomsky) : 1928-。米国の言語学者。生成文法論の創始者。

\*20文化語 (문화어) : 標準朝鮮語という意味で、1966年の金日成の教示にもとづき「標準語」という言葉に代わって用いられるようになった。

と科学性の言説をほどよく統合した北朝鮮の言語学界の強みは、その基礎を磨いた草創期の朝鮮語文研究会<sup>\*21</sup>を中心とするさまざまな言語専門家の貢献に基づいている。

政治的には不運な運命を辿ったが、金料奉の新しい文字<sup>\*22</sup>の主張は、実際その実用性は実に問題であったが、言葉の音をとらえるその鋭い視点は非常に斬新であった。李克魯<sup>\*23</sup>の組織力や指導力は、南でも北でも始終一貫していた。そして北の社会が求めていた進歩的言説に基づいた言語理論を紹介、整理し、頭音法則の問題を取り上げる中で示された精密な言語学の学術的言説を磨き、政治的正当性と言語生活の両面における発展に寄与した金壽卿の功労は、いつかは必ず実現すべき南北の言語学の学問的(再)統合において、消えることのないくっきりとした足跡を残している。

## 参考文献

- 高永根 [1994] 『통일시대의 어문문제』, 서울: 길벗.  
金敏洙 [1985, 1989] 『増補版 北韓의 國語研究』, 서울: 일조각.  
金河秀 [1990] “<서평> 金敏洙 [1989] 북한어 연구”, 『주시경학보』 제5집, 서울: 탐출판사.  
南基心, 金河秀 [1989] “북한의 문화어”, 高永根 편 『북한의 말과 글』 서울: 을유문화사.  
鄭光 [1999] “구소련의 언어학과 초기 북한의 언어 연구”, 『언어정보』 2집.  
Bruche-Schulz, Gisela [1984] *Russische Sprachwissenschaft*, Tübingen: Niemeyer.  
Girke, Wolfgang & Hachnow, Helmut [1974], *Sowjetische Soziolinguistik*, Kronberg: Scriptor.

(李陽民 訳)

---

\*21 朝鮮語文研究会(조선어문연구회): 北朝鮮で1947年に公的に設置された研究組織。1949～50年に雑誌『朝鮮語文研究』を発行した。

\*22 1948年に金料奉の名義で「朝鮮語新綴字法」案が公表された際、新たな6つのハングル要素=新6字母が提案された。ただ、その後、実際にはほぼ使われなかった。

\*23 李克魯: 1893-1978。朝鮮語学会の中心人物の一人で、1948年に越北した。